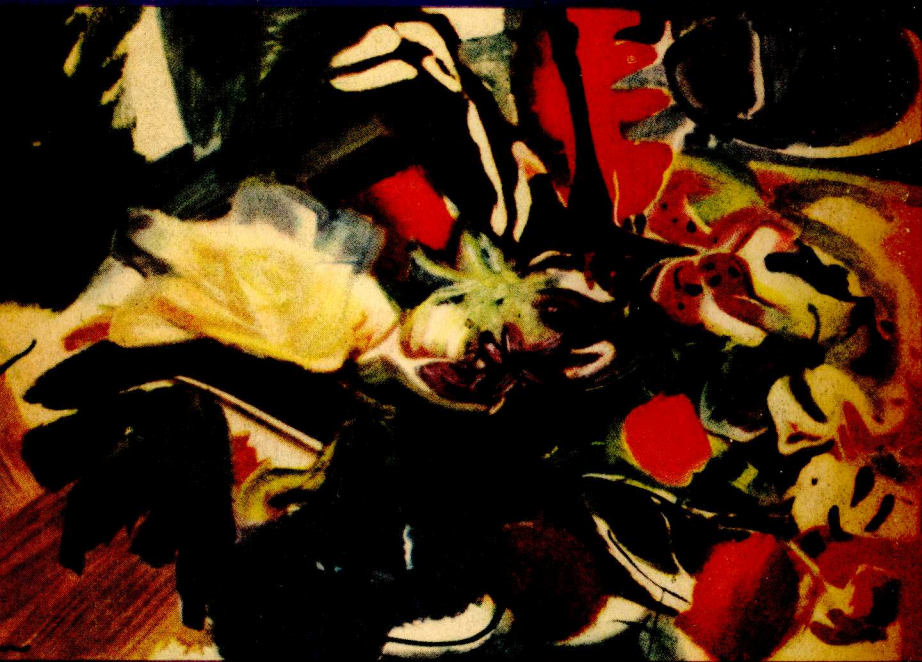


ROGER MARTIN DU GARD



LES THIBAUT 5

SHINCHOSHA

チボー家の人々

5

マルタン・デュ・ガール

山内義雄 譯

新版世界文學全集

33

新潮社 版

新版世界文学全集 33

チボー家の人々 5

Title: LES THIBAUT

Author: ROGER MARTIN DU GARD

Original copyright by Librairie Gallimard, Paris.

Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokyo.

This book is published by the arrangement
with Librairie Gallimard and Hakusuisha through
Bureau des Copyrights Français.

昭和三十五年五月二十五日 印刷
昭和三十五年五月三十一日 発行

定価 参百五十円

訳者

山内 義雄

発行者

東京都新宿区矢来町七一
佐藤 義夫

発行所

東京都新宿区矢来町七一
株式會社 新潮社
電話東京 (341) 三二一九番
振替東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷 二光印刷株式会社
製本 荒木製本所

© Printed in Japan

目次

一九一四年夏 (3)

七十五	八月二日・日曜日——フオンタナン夫人の前にあつてのジャックとジェンニー……………	九
七十六	八月二日・日曜日——ジェンニー、母と激論す……………	一六
七十七	八月二日・日曜日——ジャック、ジェンニーと最後に会う……………	二六
七十八	八月三日・月曜日——ジャック、ジェンニーに帰る——メネストレル訪問……………	三四
七十九	八月四日・火曜日——ジュネーヴよりパールに向かう列車中のジャック……………	四四
八十	八月四日・火曜日——ジャック、パール駅の食堂にかくれて、アジビラを書く……………	五五
八十一	八月五日より八日——ジャック、パール……………	

ルに滞在……………	三二
八十二 八月九日・日曜日——最後の準備……………	三三
八十三 八月九日・日曜日——岡の上での会合……………	三九
八十四 八月十日・月曜日——最後の措置……………	六八
八十五 八月十日・月曜日——アルザスにおけるフランス軍の退却……………	九三

エピローグ

一 ル・ムースキエ療養所でのアントワーヌ……………	三二
二 パリにおけるヴェーズ嬢の埋葬……………	三五
三 アントワーヌ旧居に帰る……………	四三
四 アントワーヌ、ジゼルとユニヴェルシテ 町の家にて昼食を共にす……………	五〇
五 リュメル、マクシム亭にアントワーヌを招 待す……………	五三
六 アントワーヌの夢……………	五七
七 アントワーヌ、メーゾン・ラフィットを訪……………	六〇

ねる——ダニエル、ジャン・ポールとの朝

のひと時……………一八三

八 ジェンニーとの最初の語らい……………一九五

九 ジェンニーとの二度めの語らい……………二〇六

十 フォンタナン夫人を、その病院に訪ねる……………二二三

十一 ジャン・ポールと伯父アントワーヌ……………二三八

十二 メーソン・ラフィットでの夕——ジェン

ニーとの最後の語らい……………二三五

十三 フィリップ博士の診察……………二四八

十四 警報発令の夜……………二六七

十五 手紙……………二七三

十六 アントワーヌの日記……………二八四

七月……………二八四

八月……………二九〇

九月……………三〇二

十月……………三〇五

十一月……………三七六

Title: LES THIBAUT
Author: ROGER MARTIN DU GARD

Original copyright by Librairie Gallimard, Paris.
Copyright in Japan by Hakusuisha, Tokyo.
This book is published by the arrangement
with Librairie Gallimard and Hakusuisha through
Bureau des Copyrights Français.

本書は仏蘭西著作権事務所を通じて、原版權所有者ガリマール書店と
日本語版權所有者白水社の諒解のもとに刊行する。

チ
ボ
ー
家
の
人
々

5

一九一四年夏
(3)

七十五

フォンタナン夫人は、その結婚生活の最悪の時に、おいてさえ経験しなかったほどの煩悶のうちに朝をすごした。

さいわい、ダニエルの部屋の戸はしまったままになっていた。そして、紅茶をいれようと台所へ出かけてさえ行かなかったら、おそらく自分が悪夢にだまされたものと思っていられにちがひなかった。だが、二人分の食器が目にはいったとき、夫人は本能的に目をつぶり、またわれ右をしたかと思うと、そのまま自分の部屋へ帰ってとじこもった。

力抜けのした数分の後には、まるで夢遊病者といったような、熱に浮かされたような時がつづいた。そして、旅行服をぬぎ、古い部屋着にきかえ、部屋の中を整頓し、何やかやらちもないことをせいせい言いながらやってのけたあとで、夫人は、じっとしていようと思つて、日のあたる錠戸をしめた窓ぎわの安楽椅子に腰をおろした。何をおいても、自分というものはつきりとりもどさなければ。だが、そのためには、いつもの小さいバイブルは、スーツケースの中に入れておいたので手もとに

なかった。夫人は、あたりの棚の上におかれていた、父の古いバイブルをとりについた、それは、黒い、ずっしりした分厚なバイブルで、欄外には、フォンタナン牧師の筆で、しるしやら照合の個所なりがいっぱい書きこまれていた。夫人は、手あたり次第のところをあけて、読んでみようとした。だが、おさえようとしてもおさえきれない彼女の気持ちは、ともすれば本文をはなれて、われにもあらず、とりとめのないいろいろな情景や考えのあとをたどり、その中には、ダニエルを思う気持ちと、あのウイーンでの事業家たちのこと、旅行中の難儀、軍隊でいっぱいだったほうぼうの停車場などの記憶が入りまじり、そして、そうした入りみだれた考えの末には、それのしめくくりをつけるといったように、いつもきまつてジェンニーとジャックがからみあつて眠っていたベッドの光景が思い浮かぶのだった。近くの大通りを通る輻重車のひびきは、あたりの壁をゆすり、夫人の頭の中にこだまし、その幻想を何か不吉な伴奏でつつんでいた。夫人は、生まれてはじめて、恐怖の気持ち、パニックの気持ちにおしつぶされ、それをどうしても反発できずにいる自分を感じた。旋風にまきこまれ、それにひっぱられていくといった感じ、怖ろしい混乱がヨーロッパを荒らし、わが家を荒らし、いまや世界に《悪霊》が凱歌をあげているといった感じ。

夫人はとつぜん、控え間のほうにあたつて、何か人の動

くけはいを耳にした。と思うまもなく、彼女は廊下に入の足音を聞きつけた。思わず顔がこわばった。立ちあがるだけの力もなかった。夫人はただ、上体を起こしてみただけだった。ドアがあいた。そして、服喪中のヴェールのかげにおそろしいほど蒼い顔をしたジェンニーが、じっと目をすえながら、すさんだ表情をしてはいってくるのが見えた。

枝葉模様の着物を身につけ、膝の上にバイブルをのせ、いつもの場所にかにも落ちついたようすで腰をおろしている母を見た瞬間、ジェンニーは、はっとおどろいてどぎまぎした。いままで何年となく忘れていた自分の過去のすべてが、とつぜん目の前におどりと出てきた感じだった。彼女は、自分のうしろにためらっているジャックのことも忘れ、いきなり母に駆けよると、両手をひろげてだきついた。そして、もつと体をくっつけようと、敷物の上に身をすべらせ、ひたいを母の着物におしあてた。

「ママ……」

夫人は、かわいという気持ち、いとしいという気持ちで、一瞬胸の苦しみを救われた。夫人の心は、寛容の気持ちでいっぱいだった。と同時に、自分の見つけたあの秘密も、いまや一場の醜事実としてではなく、単なる弱さでもいったように、これまでとちがった光のものと考えられた。夫人は、あわやわが手にもどった娘の上に身をかがめ、彼女を腕にだいてやり、打ちあけ話を

聞いてやり、不始末の相談にものってやり、わかってやり、助けてやり、これからさきの指図をしてやろうとしかけていた。だが、夫人ははっと息をつめた。廊下の壁に、何やら影がうごいたのだ……ジェンニーだけではなかったのだ！ ジャックがいる！ そしていま、この場に姿をあらわそうとしている！……思わず、娘の首すじにおいていた手が緊張した。夫人は、目を、あけ放たれた戸口から放さなかった。ほんのわずかな時が過ぎた。紗のヴェールからは、何かたまらない、つんとしたにおいがただよっていた……ついに戸口のところに、ジャックが姿をあらわした。フォンタナン夫人の目の前には、ふたたびあのベッドの光景、失神したような二人の顔がちらついた。

夫人は、しめつけられたような声の中に、非難と恐怖をこめながらつぶやいた。

「あんたたち……ほんとに、あんたたち……」

ジャックは、すでに部屋の中へはいってきていた。彼は夫人の前に立ちながら、臆したような、同時に何か尊大ぶったようすで、じっと夫人の顔をながめていた。そこで夫人は、はつきり言った。

「こんにちは、ジャックさん」

ジェンニーは、さっと顔をあげた。もちろん彼女は、笑ってなんぞいなかった。だが、顔を妙にゆがめながら口をあけていることが、その顔に、何かしら悪魔的な喜

ひとでもいったような印象をあたえていた。そして、本能をむき出しにしたような、ぜんぜん変わった一つの光、何かふてぶてしい一つの光に、青いひとみがきらめいていた。彼女は、ジャックのほうへ腕をのばし、さっと手首をつかんだと思うと、荒々しく自分のほうへひきよせた。そして、母のほうをふり向くと、つとめてやさしく見せようとしながら、しかも勝ち誇った感じ、同時にいどみかかるといったような、ほとんど脅迫するような調子でこう言った。

「ママ、わたしこの人に会えたんですの！　そして、これからはずっと！」

フォンタナン夫人は、一瞬、二人を次から次と見まもった。夫人は、つとめて微笑しようとした。だが、だめだった。唇からは、思わず力ない溜息がもれた。

ジェンニーは、じっと母を見つめていた。この溜息、恐怖と同時に温情にわなないている母の顔、ジェンニーは、そこに承認のしるしをこそ読みとるべきだったのに、彼女の疑りぶかい感性は、そこに不賛成による悲しみの色しかみとめなかった。彼女は憤然とした。そして、子としての愛情の底の底まで傷つけられたように思った。彼女は、母から身をひき離すと、そのままさっと立ちあがって、ジャックに身をよせて立ったのだった。反抗するようなその態度、かっとなえ立ったその眼差し、そこには、とはうもない、盲目的な、ふてぶてしくも挑戦的

な傲慢さがうかがわれた。

これに反してジャックのほうは、深い親しみをたたえながらフォンタナン夫人をながめていた。そして、もし何か口にするとしたら、それはまさしくこうした言葉にちがひなかった。『ぼくにはあなたがよくわかります……だが、あなたも、ぼくたちのことをわかってくださるなければ……』

フォンタナン夫人は、ちらりと二人のうえへ当惑したような眼差しをそそいだ。夫人は目を伏せた。あのベッドの光景を、またもやはつきり思い浮かべたからだだった。しばらくのあいだ、沈黙がつづいた。

やがて、夫人は、いつもの習慣から、ジャックのほうへ向かって愛想のいい身ぶりをした。

「二人とも、立っていないで、腰かけたらどう……」

ジャックは、ジェンニーのために椅子をすすめてやった。そして自分は、フォンタナン夫人からしめされたように、その左手に腰をおろした。

こうしたかんたんな幾つかの言葉、それによって空気は緩和されたようだった。まるで単なる訪問といったように、三人が円陣をつくって座を占めたとき、空気は落ちつき、正常に復しかけた感じだった。ジャックは、ほとんど常とかわらない調子で沈黙を破ると、夫人の帰りの旅行について何やかやとたずねることができた。

「では、いちばんしまいに出した手紙を受けとらなかつ

たのね？」と、フォンタナン夫人がジェンニーにたずねた。

「一本も。ママからは一本も手紙がこなかったわ。ただこの葉書だけ、最初の葉書、月曜に、ウィーンの停車場で書いた葉書」ジェンニーは、歯を食いしばりながら、息切れたように話していた。

「月曜？」と、フォンタナン夫人はくり返した。ひきつづく一日一日を思い出そうとする努力で、夫人は目ばたきをつづけていた。「だって、わたし毎晩二本ずつ手紙を書いたのよ。あなたに一本、ダニエルに一本」ダニエルのことを思った夫人は、あらためて、胸せまるような気持ちになった。

「一本もこなかったわ」とジェンニーは、ぶっきらぼうに言つてのけた。

「そして、ダニエルからの便りはなかった？」

「あつたわ。いっぺんだけ」

「今どこにいるの？」

「リュネヴィルを出発したんですって。それからなんにも」

沈黙。氣づまりになったジャックは、ふたたび口を切つた。

「そして……いつウィーンをお立ちでした？」

フォンタナン夫人は、ちよつと思ひ出すのに骨が折れた。

「木曜日」と、やつとのことで夫人が言った。「そう。木曜日の朝ですわ……でも、ウディノ（イタリヤの都市）に着いたのは、夜になってから。そして、翌日の正午になって、やっとミラノへ向けて出発することができましたの」

「その木曜の朝、オーストリアでは、すでにベルグラードの砲撃と占領のことがわかっていましたかしら？」

フォンタナン夫人は、当惑したようすで、じつとジャックの顔を見つめた。

「さあ、どうだったかしら」と、夫人は言った。ウィーン滞在中、夫人はただ夫の名譽を守ることしか考えなかったのだった。そして事件の経過には、ほとんど注意をしていなかった。

「ジェンニーは、事をうまく処理できたかどうかさえ聞こうとしない」と、夫人は思った。そして娘を見ながら、とつぜんこうした辛辣なことを思い浮かべた。▲わたしの帰つてきたことを、がっかりしているんじゃないかしら？▼

ジャックは、何か言わずにはいられない気持ちで、ウィーンでの民心の状態、デモ運動のことをたずねつづけた。そして、フォンタナン夫人も、ジャックとおなじく、あたりさわりのない題目にすがりつきたい一心から、つとめてなんとか答えようとした。つまりそれだけ、怖ろしい解決の時期をおくれさせることができるのだった。というのは、三人は、一つの▲解決▼がせまっ

ていて、それが不可避なものであることを考えつづけていたからだった。

ジャックは、話に引き入れようとするかのように、たえずジェンニーのほうをかえりみていた。だが、なんの手ごたえも得られなかった。ジェンニーは、話を聞いていないらしかった。頭をきつと立て、やせた顔をひきつらせ、どこを見るときも冷たい目つきを見せながら、しかも、けさは唇をきつと食いしばり、顎を前に突き出しているところ、単に人から離れていたいといった気持ち以上に、さらにひそかな、水くさい、敵意のこもった緊張を見せているのだった。もたれにじゅうぶん腰をささえてもらえない椅子に腰をおろし、体がつらく、神経のいらだたせてきていた彼女は、なんの感動もみせない眼差しで部屋の中を見まわしていた。そして、ときおり、現実とはなれた舞台装置の中の仕出し役者でもながめるように、その目を母のうえにそそいでいた。パイプルを手にしなが、窓からの光線をうけるためいつも斜めにおかれている古ビロードの安楽椅子に腰かけている母の姿は、まるでこの世のはじめから、ずっとそこにいたとでもいうようだった。それは遠い昔の思い出、一刻一刻しずかにわが身をはなれていく、いまは過ぎさったその過去(それは何かしら心にしみながらも、とりわけ腹立たしく思わずにはいられない)を象徴しているものだった。彼女にとって、そうした過去は、ちょうど別れを告

げにきた親戚の人たちの群が、船出をする人から遠くさつていくのとおなじように、もやの奥ふかく沈みこんでゆくように思われた。彼女はいま、すでにほかの岸辺へ向かつての船旅にのほりかけているのだった。そして、出発準備をととのえている船とでもいったように、彼女はすでに胸を高鳴らし、新生活の脈搏を感じていた。もしもこのときジャックにして彼女の腕をとり、^へ来るんだ。すべてを、永久に捨てるんだ^ととも言つたとしたら、おそらく彼女は、自分の背後に一瞥も投げずに、そのまま出発したにちがいないかった。

沈黙の中で、ジェンニーとダニエルの写真のそば、枕もとの机の上におかれた小さな置時計が、長々と時を報じた。

ジャックはそのほうへ目を向けた。そして、とつぜん逃げ出したくなった彼は、ジェンニーのほうへ身をかしげた。

「十一時……ぼくはそろそろ行かなくっちゃあ」

二人は短かい目くばせをかわした。ジェンニーは、同意の意味でうなずいてみせた。そしてすぐ、ジャックよりさきへ立ちあがった。

フォンタナン夫人は、じっと二人をながめていた。夫人の胸に浮かんだ考えは、とてもつらいものだった。あれほど真実な、あれほど純粹なジェンニーが……いまはまったく別人の感じ！ はぐらかすともいっただう

す、**「あばすれ」**とでもいったようす……そうだ、表面すっかりしているように見せかけながらも、二人からは——そうだ、それが二人であればこそ——何か偽善者めいたようすがうけとられた。二人は、まるで自分たちが解微僧（ローマ時代、鳥の鳴き声、動物の足跡などによって吉凶を卜せる僧）であり、自分たちがけが秘義に参しているともいったように、いささかばかばかしいほどの思いあがつたしかつめらしさを見せながら、たがいに顔を見かわしていた。フォンタナン夫人は、それを**「おなじ穴のむじな……」**と解釈した。その解釈にまちがいはなかった。二人には、陶醉するような恋のたくらみがあったのだった。その恋こそは、二人にとって、絶対のもの、神秘なもの、先例のないもの、唯一のもの——そうだ、とりわけ唯一のものにしておきたいもの、すなわち二人のほかの誰にも、その特殊性の中に分け入りがたくしておきたいもの！

ジャックは、ジェンニーの同意にはげまされて、暇乞いをしようとフォンタナン夫人のほうへ近づいた。

夫人は、あまりとつぜんの出発に、すっかりあわててしまっていた。もうこれ以上なんの話もせず、自分一人を残していこうというのだろうか？ 自分は、たかがこの程度にしか信用されていなかったのか？……夫人は、われとわが心を納得させようと、わが身を傷つけるこうした無礼さをさえ甘受しようとつとめていた。むしろ自分のほうからこそ、打ちあけ話を仕向けるべきでは

なかったろうか？ だが、いまとなっては手おくれだった。夫人には、もうそれだけの勇気がなかった。それに、疲労のため、これまでを受けた精神的な衝動のため、不きげんと不当なあしらいに揉みくしにされ、すっかりいらいらしていたのだった。そうだ、こうした最初の面会が、なんらいざこざなしに終わったほうがむしろよかったにちがいないのだ……それでいて、夫人は、ジェンニーをうらまずにはいられなかった。だが、目下の場合、うらむといえ、それは、娘の道ならぬ恋愛沙汰というより、むしろなんとも不可解きわまる、筋の立たない、承知できないあの反抗的な態度だった！ 夫人は、ジャックにたいして、なんら非難の気持ちを感じなかった。むしろ、訪問のあいだじゅう、好感をさえ感じていた。そのおずおずした謙遜のかけには、暗黙の理解をさえ感じていた。そうしたジャックにたいし、純粹な良心、なんら卑しいところのない心の生活をさえ察していた。それに、ダニエルのお友達でもあることだし。夫人は、もしも主の思召しということだったら、わが子のように愛してやりたい気持ちだった。

彼にたいしてなんら恨みがましい気持ちのなかった夫人は、いざ手を握ろうとするにあたって、ちょうどダニエルにたいしてとおなじく、ジャックを自分のほうへ引きよせ、**「いはいえ、それよりキスさせて」と**、危うく言いかけるところだった。ところが、おりあしく、夫人はそ